分類	主な意見の概要	事業者の見解
陸域生態系（つづき）	・石垣島全域におけるカンムリワシの生息状況調査を行わず、98年の調査結果を利用していますが、絶滅危惧種において６年前の調査結果を利用することは不適当であり、小型コウモリについて全島調査を行っているのと一貫しない。カンムリワシは近年多くの交通事故が報告され、個体数の減少要因であるとともに、生息域と人間生活域との競合が大きくなっており、生息環境の変化をあらわすものと思われ、現時点での生息数、生息状況を把握する調査が必要。	1998年に日本野鳥の会八重山支部によって行なわれた全島調査は多くの市民ボランティアなど延べ165人もの参加者（西表島も含む）の協力により行なわれたものであります。このような大規模な一斉カウント調査は最も信頼性の高い結果であるといえ、現時点で最も信頼できる最新のデータとして引用しました。これにより、石垣島全島のカンムリワシの生息分布について把握することができたと考えています。また、事業実施区域近傍に生息するカンムリワシ個体群については平成13年から３年間に及ぶ詳細な現地調査を実施しています。
	・カンムリワシの個体識別は、容易でないのに一部の羽毛の欠損を見て、個体識別をしそれを元に行動圏を推定して工事に伴う影響を予測していることは不確実性と思われ疑問である。	カンムリワシを含め猛禽類の個体識別はマーカー装着以外には区別が難しく、高空で飛翔している場合は羽毛の欠損状態以外に判断する材料がありません。但しとまっている場合など、体型や体色の違いが観察できれば体色等の特徴から個体識別を試み、また飛翔時と静止時の２つの観察ができたときは写真を対応させて飛翔時の識別の精度をあげるように調査しています。 今回の解析には羽毛による識別ができた2年間の成果を使用して営巣中心域、最大行動圏を抽出するとともに、全個体の飛翔経路を整理分析し、タキ山を含むカタフタ山周辺の高木林を拠点とした飛び立ち、降り立ちが頻繁に確認されており、於茂登岳などの他の地域からの進入個体を追い払うなわばり行動が特徴的に見られたこと等も合わせ考慮し、ここに定着している繁殖個体群がいることは推測でき、これらの飛翔軌跡、なわばり誇示行動なども行動圏の推定に反映していることから、カタフタ山周辺域を繁殖中心とする個体群の行動圏を良く表しているものと考えています。
	・カンムリワシの調査対象としたペアは繁殖に成功していない。これは、影響評価の信頼度・達成度を大きく低下させる。	調査期間中には調査対象ペアのものと思われる営巣跡が確認されており、図6-12.1.1(21)に示すように平成13年と平成14年には若鳥が繁殖ペアの行動圏内に確認されていることから、繁殖に成功した可能性が高いと判断しています。その期間の調査結果に基づいて内部構造を検討しています。 調査結果を総合すると、この地域においては「恒常的な繁殖が行われるといえないまでも、今後も繁殖が行なわれる可能性がある（p6-12-41 9行目）」との視点から慎重に予測評価を行っており、影響の低減をはかるべく適切な保全措置を講ずるとともに、事後調査を実施し、影響の把握につとめてまいります。
	・カンムリワシの騒音の影響予測は、騒音に馴染むとの憶測によるもので再検討が必要である。	カタフタ山に生息・繁殖するカンムリワシの高利用域内にはp6-12-78、79に示すように農地や牧草地の造成や道路新設が行われており、また、牧草やサトウキビの刈り取りの際にカンムリワシの採餌行動が確認されていることから、人間活動との関わりを示唆するものと思われますが、建設作業騒音がカンムリワシに及ぼす影響について不確実性を伴うことから、事後調査を実施していくこととしています。